殊音とコトネ

菠月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
殊音とコトネ

【Ｎコード】
Ｎ６７５５Ｙ

【作者名】
菠月

【あらすじ】
後悔ばかりし、自己嫌悪な宮田　殊音はある帰り道に老人に会う。老人に渡された薬を飲むと意識を失い、覚めるとそこにいたのは…

「ハァ～また暴言吐いちゃった…」
宮田（みやだ）　殊音（ことね）、大学一年生。彼女には今まで抱え込んできた悩みがある。それは……

自分が嫌いっていうこと。

どうしてかと言うと、私は会話中あまりに盛り上がってしまうと暴言を吐いてしまい、後々後悔ばかりしているのだ。今日こそは！と心の中で誓ったが結局会話中はそのことを忘れ、今日も友達に暴言を吐いてしまった。友達はいつものことだとそんなに心配はしていないのかもしれないが、私にとってはとても辛く、自分の性格が憎い。
「どうすれば直るのよー！」
帰り道、つい口から出てしまった。周辺に人がいなかったのが幸いだった。数十秒に一回溜息を吐きながら歩いていると、目の前に路上に立ち、両手を杖で支えている一人の年老いた老人がいた。あたしは声かける訳もなく通り過ぎようと老人の前を通ると、
「直したいんじゃろ？」
「えっ？」
突然聞こえた言葉にあたしは思わず止まってしまった。
「その性格…直したいんじゃろ？」
あたしは振り向く。老人は目を瞑ったまま喋る。
「性格、直したいんじゃろ？」
「は…はい」
「だったらこれを飲みなさい」

すると老人はポケットから何か出してきた。見ると瓶に入った一粒の錠剤。
「これを飲めばおまえが日頃ウザいと思っている性格部分だけが直るぞ」
「でも…」
これは悪質な奴なのかと殊音は迷う。
「大丈夫じゃ、代金などは要らない。騙されたと思って飲んでみなさい」
老人は殊音に瓶を渡すとゆっくり殊音とは逆方向の道へと歩き始めた。返そうと思ったが返す勇気が無かった。

結局瓶を家に持ち帰ってしまい、テーブルに置き、座って瓶を見る。
「こんなん飲んで性格が変わるのかなぁ。けど…私が普段ウザいと思っている自己嫌悪が直ったらいいかも……」
飲もうか飲まないかで迷い続けて１０分。結局、
「試しに飲んでみよう！」
蓋を開け、中に入っている一粒の錠剤を取り出し、水と一緒に飲み込んだ。
「やっぱりいきなり効果は現れないわよね…」
と思っていると直ぐに効果は現れ始めた。それは睡魔だ。
「なに…も、もう…効いてきた…って…わけ…」
意識が朦朧としてきた。そして殊音は意識を失った。

「ここ……どこ？」
瞼を開けるとそこは暗闇の世界だった。立ち上がると、突然一本の線が殊音の足元から先へと伸び始めた。殊音はその線へと歩いていくと光が徐々に見え、光の先へと進むとそこは真っ白い世界で、

暗闇の世界への道は閉ざされた。
「ここは…」
辺りを見回していると、目の前に一人の影が現れ、姿を見せる。
その姿に私は驚いた。何故なら…
「な、なんで…どういう…こと」
声が震える。目の前にいるのは髪の色と服の色は違うが、正しくそれは私…私なのだ。
「初めまして」
「え？」
「あたしの名前はミヤダ　コトネ。よろしく」
「あ、あぁ…」
「ねぇ、自分の事…好き？」
突然もう一人のワタシが尋ねる。
「わ、私！？私は…正直…」
「嫌い、なんでしょ？ワタシもよ」
解っているかのようにもう一人のワタシは答える。質問は更に続く。
「ねぇ、もし嫌な性格が直ったら喜ぶ？」
「そ…それは…」
「ふ、答えないのね。ワタシだったら素直に…喜ぶわっ！」
すると突然もう一人のワタシが手から何かダイヤモンドのような尖ったものを投げた。
「うっ！」
それは殊音の腹部に中った。殊音は後ろに倒れかかるとそれは突如消えた。しかし殊音は地面に倒れ、意識を失った。するともう一人の自分が私に近づいてきた。
「あなたは自分のことが嫌い、所謂自己嫌悪なんでしょ？自分が嫌なら殺しちゃってもいいでしょ？」
もう一人のワタシは倒れた私の服を掴んだ。
「だったら楽にしてあげる。ワタシもあなたこと…嫌いだから」

ポトッ
　すると何かが殊音の皮膚に落ちた。意識を取り戻し瞼を開けると、もう一人のワタシが何故か泣いていた。
「どうして…泣いてるの」
「五月蠅い！ワタシは今まで苦しめられてきた。あなたが自己嫌悪だからって日頃自分を後悔する度にそのショック、悔やみがワタシに来るの！あなたは直ぐに機嫌を直すけど、ワタシは今まであなたの辛さをダメージとして受けてきたの！」
　喋る度に殊音の肌に涙が落ちる。
「だから、ここで…ここで楽にしてあげる！そうすればあなたは一生苦しまなくてもいいんだから！あたしみたいに苦しむようなことはないんだから〝っ！！！」
　コトネはダイヤモンドのような尖った物を刺そうとすると殊音が刃を持った手を掴む。
「離して！離してよ！あなた自分が憎いんでしょ？嫌なんでしょ？ウザいんでしょ？だったら…だったらっ！」
「ごめん…」
「！！」
　その言葉にコトネは更に意識がおかしくなった。
「うわぁあああああああああああ！！！」
　尖った物は殊音の胸に刺さった。
「ハッ！」
　刺すつもりも無かったのに刺してしまったコトネは後ろに下がった。
「わ、わたしは…」
　殊音の胸から血が滲む。そんな中、殊音は起き上がる。
「ごめんね…あなた…相当苦しんでいたのね」
　四つん這いでコトネに近づく。
「あなたの苦がこれに伝わってきた。今まで苦しめちゃったんだね。ごめん」

私はもう一人のワタシを思いっきり抱いた。するともう一人のワタシも泣きながら私を抱きしめた。
「もう心配しないで…もう自己嫌悪(こんなこと)なんて止めるからさ。あなたにもう苦しみなんて味あわせないから」
するともう一人のワタシは泣き顔から笑顔になり、徐々に消えていった。そして消える直前に
「ありがとう」
と言葉を残した。

「ん、ん〜…」
瞼を開けると、自分の部屋だった。時計を見ると深夜1時。胸を見ると傷はなかった。

翌日昨日と同じ帰り道を歩き、老人に感謝しようとしたが、老人はいなかった。
「ありがとう、おじいさん」
それから殊音は会話する度、自己嫌悪(あの子)を直そうと日々意識をするようになった。全てはあの老人ともう一人のワタシのおかげ。

（後書き）

感想よろしくお願いします

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6755y/

殊音とコトネ

2011年11月20日03時11分発行